第1回スピヴァコフ国際ヴァイオリンコンクール開催
鈴木舞が第2位入賞！

特別レポート／鈴木舞

ロシアを代表するヴァイオリニスト、指揮者のウラディーミル・スピヴァコフの名を冠した新しい国際ヴァイオリンコンクールが行われ、鈴木舞が第2位に入賞した。彼女自身にレポートしてもらった。

Vladimir Spivakov　ウラディーミル・スピヴァコフ
ロシアの指導的なヴァイオリニストで指揮者。1944年、旧ソ連・ウファで生まれる。早くから神童として知られ、モスクワ音楽院でユーリ・ヤンケヴィチに師事。ロン＝ティボー、チャイコフスキーなどの国際コンクールに入賞。75年に米国デビュー。79年に"モスクワ・ヴィルトゥオーゾ"を設立。2003年から、ロシア・ナショナル・フィルハーモニー交響楽団の芸術監督・首席指揮者、モスクワ舞台芸術センターの代表を務めている。

5月10日から17日まで、ロシア連邦中央部のバシコルトスタン共和国の首都ウファで開催された、第1回スピヴァコフ国際コンクールで第2位を受賞しました。

ウファはスピヴァコフさんの故郷です。食事がとてもおいしく、そばの実やボルシチ、ストロガノフなどで力をつけ、たくさんのボランティアスタッフの細やかなサポートで、集中してコンクールに臨むことができました。

1次予選では、映像審査で選ばれた12人がJ・S・バッハ、パガニーニ、モーツァルトを演奏。通過した8人は、2次予選で現代音楽と、ブラームスかベートーヴェンのソナタ、ヴィルトゥオーゾピース（私はサン＝サーンスの《序奏とロンド・カプリチオーソ》を選びました）を、そしてファイナルでは4人が協奏曲を演奏しました。

審査員はスピヴァコフ、ボリス・クシュニール、ミハイル・コペルマン、タラス・ガボテ、ニキータ・ボリソ＝グレブスキーの5名。

会場には1次審査から多くの観客が詰めかけて、暖かい雰囲気の中で拍手を送ってくれました。そのおかげか、2次ではコンクールということを忘れ、「お客様に良い音楽を届けたい、楽しんでもらいたい」という一心で演奏できました。

ファイナル進出のアナウンスを聞いた時は、思わず涙がこぼれましたが、現地の方々や、他の出場者のお母さんたちまでもが「素晴らしかった」と代わるがわる抱きしめてくれて、ロシア人の懐深い暖かさも心に沁みました。毎日ホテルからホールまで送迎してくれた運転手さんまで応援してくれ、おおいに励まされたのは本当に良い思い出です。

ファイナルでは、直前にN響に客演したばかりというミハイル・ゲルツさんの指揮で、バシコルトスタン国立交響楽団とメンデルスゾーンを共演。リハーサルからオーケストラのみなさんがニコニコと楽しそうに演奏していたのが印象的で、本番でも共に音楽を作る喜びを共有できたように思います。

1位は、ファイナルでベートーヴェンを弾いたわずか15歳のスウェーデン人、ダニエル・ラザコヴィッチ君。このコンクールは入賞者に副賞で楽器が贈呈されるのですが、彼にはオッドーネ（時価1300万円以上とのこと！）が、私も新作楽器Maria Strelnikova（伊クレモナ製）をいただきました。

私が弾いたメンデルスゾーンのコンチェルトをスピヴァコフさんが気に入ってくれて、結果発表の前に早々と、来シーズンのロシア・ナショナル・フィルハーモニー交響楽団との共演オファーをくださいました。

ネットのライヴストリーミングを通じて、日本のみなさんにもリアルタイムで応援していただき、本当に勇気づけられました。私の入賞を喜んでくださったこと自体が、私にとっての大きな喜び、宝物です。

今回の名誉に恥じぬよう、精進を続けて参りたいと思います。

鈴木舞はファイナルでメンデルスゾーンのコンチェルトを弾いた

▲コンクールの芸術監督スピヴァコフより副賞のヴァイオリンを贈呈される鈴木舞

◀1位の15歳、ラザコヴィッチ。入賞者ガラを指揮したスピヴァコフと

すずき・まい
1989年5月30日、神奈川県生まれ。2006年日本音楽コンクール第2位。07年チャイコフスキー国際コンクール最年少セミファイナリスト。13年フムル国際コンクール（クロアチア）第1位、オルフェウス室内楽コンクール（スイス）第1位。東京藝術大学卒業後ローザンヌに留学、ピエール・アモイヤルに師事。現在ザルツブルク在住。公演予定はホームページ（http://maiviolin.com）へ。